

2024 年度 外部評価委員会 実施報告書

1. 外部評価委員会を終えて

「創価大学自己点検・評価実施規程」第 12 条第 3 項に基づき、本学の自己点検・評価活動の客観性、公平性を担保するため、外部評価を実施しました。

本学は 2020 年度より毎年、全学的な取り組みを対象とした外部評価を実施しており、外部評価委員を 2 年ごとに改選しています。本年度より第 3 期目に入りました。昨年度まで同委員として多くのご助言をいただいた濱名篤先生、篠永正徳先生に心より感謝申し上げます。

2024 年度の外部評価は、2023 年度の本学の取り組みを学長ヴィジョンに沿った形式で取りまとめ、外部評価委員から評価をいただく方針としました。具体的には、教育・研究・SDGs・ダイバーシティ・経営基盤の構築の 5 つの分野で報告内容を構成しました。本年 7 月に開催した外部評価委員会では、鈴木学長から本学の取り組みについて説明した後、質疑応答を行い、活発な意見交換ができました。後日、外部評価委員から提出された評価報告書では、本学の長所・特色、課題など多くの提言をいただき、改善・向上に向けた重要な視点を多く得ることができました。次頁より外部評価委員からの提言概要を紹介します。

残念ながら、世界では未だ終わりの見えない紛争や軍事衝突が続き、多くの民間人が犠牲となっています。このような時代にあって、青少年の可能性を開き平和な未来を実現する教育としての「創価教育」を高く掲げ、その実践に取り組むことが、人間教育の世界的拠点としての本学の使命であることを再確認しました。外部評価委員からいただいた評価結果を活用し、「Soka University Grand Design 2021-2030」に示した「価値創造を实践する『世界市民』を育む大学」を目指して、ますます教育・研究改革に取り組んでいく所存です。

最後になりましたが、ご多忙の中、本学の外部評価委員をお務めいただいた委員の皆様、改めて感謝申し上げ、あいさつとさせていただきます。

2024 年 10 月

創価大学 副学長

全学自己点検・評価委員会 委員長

西浦 昭雄

2. 外部評価委員からの提言概要

(1) 教育

①長所・特色とされた事項

○DX を活用した学生支援

- ・ 「DX を活用した学生支援計画」により、学生自らが多面的に学びを振り返ることができる環境を整えていることが認められる。授業アンケートの内容が、授業者評価ではなく、学生自身の理解度や到達度という学習アンケートになっており、それらを可視化することで授業の取り組みを振り返ることが出来るシステムは、他大学でも参考になる取り組みであると評価できる。振り返ったあとでの学修支援環境も整っている。その上で学修成果の可視化において、学生の DP 達成度に関してはまだ工夫の余地があると思われる。個々の授業と DP との関係は整理されているとの大学側からの回答であったが、さらにポートフォリオ等の活用によって可視化の促進を果たしていただきたい。
- ・ 「学生第一」の学生支援は実現されていると思います。今後も DX を活用し、学生×教員×職員で情報共有し、プラス・マイナス両面を掌握し、学生本人が納得し、成長を実感できる体制を整える。
授業アンケートも実施しているが、満足度ほか、もう一步踏み込んだ評価・数字を見てみたい。
- ・ 学生自身が学びの振り返りが容易になるよう可視化したり、学びのつまずきに直面している学生を確実に捉え、成績が確定する前の段階で学生をサポートしたりするなど、学生自身も成長を実感できるしくみづくりに取り組み、成果を挙げていると評価します。

○社会のニーズに応じた学びの提供

- ・ データサイエンス教育（AI 対応）にもいち早く取り組んでいる。学士課程においても 2026 年度を目途に、新学部や新学科設置も構想されており、現代社会の変化に対応する準備がなされている。
- ・ データサイエンス教育の全学必須化や産学連携科目の開講など、時代のニーズに合わせた戦略を実行に移され、データサイエンス教育推進センターが中心となって学修成果や満足度のモニタリングをされていることは大きな成果だと思います。あらゆる分野でデジタルを活用したトランスフォーメーションが起こっており、実社会でのビジネスモデルの変革や様々な社会課題解決に必須のスキルだと思います。技術の進展をはじめ変化のスピードが速い分野ですが、そのようなイノベーションを起こせる人材の輩出に向けて中長期的な成果に期待したいと思います。
世界市民教育カリキュラムマップや、SDGs 副専攻のスタート等、共通科目と専門科目の横断的な履修の仕組みが整備されており、複合的な学びと思考力の鍛錬につながる素晴らしい取り組みだと思います。
- ・ グローバルやデータサイエンス、SDGs など、高等教育においてトレンドになっている学びに関してしっかり取り組んでおり、高く評価できる。

○内部質保証への学生参画

- ・ 大学の方向性を議論するに際して、学生も参加するという創立当初からの文化があり、内部質保証にも学生が参加するという先進的な取り組みを行っている。また、教学マネジメントの要である学修成果の可視化についても、学生さん自身がそれに取り組む仕組みが構築されつつあり、教学マネジメント指針の方向性と合致している。
- ・ 創価大学自己点検・評価や内部質保証で学生の意見聴取を実施し、学生代表からの改善提案が行われ協議されていることは、学生中心のアカデミアを象徴する好事例として高く評価できると思います。

②課題とされた事項

○地域と連携した学びの発信

- ・ 大学が立地する地域への貢献に関しては、八王子コンソーシアム等に関する事例が多くあるとのことだが、ゼミという教員個人の活動に留まらず、大学として地域をどのように位置づけているのかについて、さらに明らかにしていただきたい。また外部評価報告書にも記載をお願いしたい。
- ・ グローバルな学びは十分に用意され、SGUとしての役割も果たせていると思う一方で、地域との一体となった学びについては、これからも継続して検討していただきたい。
- ・ 地域課題に熱心に取り組んでいる事例を広く知っていただくため、市との連携や大学間連携、自治体のコンクール等での事業提案などについても報告書に掲載することをご検討ください。

○志願者層へ「学びの成果」の発信

- ・ 課題は、中身の濃い教育内容に関しての情報発信が受験生などに浸透しきれていないことである。さらに、大学卒業後の進路という部分においても、卒業生の活躍が光っているにも関わらず、この点も情報発信が弱くないだろうか。今の受験生の保護者は就活で苦労した世代だけに、わが子の就職に関しては敏感である。その点も踏まえながら教育の中身と、その結果としての就職というものを連動させた情報発信が求められよう。

(2) 研究

①長所・特色とされた事項

○重点研究の推進

- ・ 「創価大学重点研究拠点」制度を構築し、「糖鎖生命科学融合研究拠点」「プランクトン工学研究拠点」、および「マレーシア研究拠点」の3拠点が認定されている。特徴ある研究活動と大学による認定を通じた支援によって、大学の使命でもある研究による社会貢献を実現していると高く評価する。特に文部科学省「大規模学術フロンティア促進事業」にも採択された「糖鎖生命科学融合研究拠点」は、私立大学としても特筆すべき研究である。
- ・ 研究のための環境や制度を整えることと並行して、重点研究を指定した取り組みがなされていることは、評価に値する取り組みである。

- ・ 重点研究として3拠点を選定され、いずれも国際競争力強化につながる特色ある研究で成果を収められていると思います。プランクトン工学研究で、博士課程の大学院生がエチオピアのホテイアオイ由来のバイオ炭による土壌改良効果を発表され、日本炭化学会の発表会で優秀発表賞を受賞されるなど素晴らしい成果だと思います。言うまでもなく、気候変動や生物多様性、水資源保全などのあらゆる環境課題で土壌改良は注目されており、食料安全保障にもつながることから今後の更なる研究成果と発展に期待しております。また国内では、名古屋大学発のベンチャーとして高機能バイオ炭事業を営むTOWINGが有名ですが、農研機構等と連携し、海外でも商社と組んでラボとバイオ炭事業を展開するなど話題となっております。2050年には人口が14億人から25億人になると言われているアフリカでは、すでに異常気象等による農作物等への悪影響も出てきており、プランクトン工学研究所での成果や技術をもとに創価大学発のベンチャーとしてアフリカで事業展開という可能性もあるのではないかと愚考しております。今後の更なる研究の進展と展開に期待をしております。
- ・ 創価大学の「糖鎖生命科学融合研究拠点」「プランクトン工学研究拠点」「マレーシア研究拠点」について、研究主体となる理工学部の規模を考えた時に、創価大学が、どこまで実力を発揮できているのかが気になる。とはいえ、先端的な研究であるだけに、文系の大学と思われるがちな大学のイメージを払拭することにもつながるだけに、積極的な情報発信を期待したい。さらに、大学創立の理念を踏まえて設立された国際平和学研究科などは、大国を巻き込んだ紛争が起きている時代だからこそ、国際機関としっかり連動しながら、その存在意義をもっともっと発信してほしい。
- ・ 3つの重点研究拠点を形成し、食糧問題・環境問題の解決に資する研究に取り組むなど、全地球的な規模の課題に対する貢献は大きいと評価します。

②課題とされた事項

○社会課題への貢献を通じた研究力ブランドの構築

- ・ 地球、環境、現代社会の課題において、世界が注目する研究(国際的に評価されている)に取り組んでいる。ただ、これらの取り組みがあまり表に出ていない(周知・広報活動が不十分?)という気がするので、研究者・教員側の積極的なアピールの必要になってくる。

(3) SDGs

①長所・特色とされた事項

○全学的なSDGs施策の具体的推進

- ・ 「創価大学SDGsグッドプラクティス」制度の立ち上げや「創価大学SDGsアンケート」の実施、「創価大学SDGsレポート2022」の発刊などを行い、学内外でのSDGsの推進に努めていることが評価できる。またSDGs目標達成に貢献する人材の育成と、SDGs学生・専門家・実務家ネットワークの構築と拡大に努めており、多くのイベントが開催されている。そこに参加する学生たちの人数や学部ごとの割合などのデータの開示もお願いしたい。また教育学部での取り組みを大学全体に発展させたユネスコスクール支援活動において、地域のユネスコスクールの活動支援を行っていることも確認できた。

- ・ そもそも、SDGs を評価項目として設定されていることが、SDGs 推進に向かう大学の姿勢を表しており、素晴らしい。実際に展開されている取り組みも素晴らしい中、キャンパスにおいて学生さんたちが、現在の取組も踏まえつつも、もっと SDGs に関わることができると思う。
- ・ いち早く、積極的に、取り組んでおり評価出来ます。継続して、環境・気候問題ほか、国・地域・企業・大学等と連携し、世界をより良い方向に導いて欲しい。
- ・ SDG s 達成に向けて学内外の専門家等とのネットワーク構築に継続的に取り組んでおられ、社会実装を目的に学生の自発的な取組を促進しており、グッドプラクティス制度での受賞プロジェクトも誕生するなど、継続的な取組の成果が出ているものと高く評価します。また UNHCR や UNDP との連携をはじめ、地球規模の課題に取り組む国連機関や専門家との交流やプロジェクトへの参画は、世界市民としての人材育成に非常に意義のある取組と評価します。

○サステイナブルキャンパスの検討着手

- ・ 気候非常事態宣言を発出され先進的に気候変動の適応と緩和に取り組む大学として、キャンパスの脱炭素化計画を作成され取り組みを開始されたことは大きな一歩だと思います。設備投資コストが掛かると思いますが、内部炭素価格を設定され予算化されることも一考かと存じます。また学内で知見や自然豊かなキャンパスを活かしたカーボンクレジット創出の可能性についても、ご検討いただけますと幸いです。

②課題とされた事項

○2030 年以降のアフターSDGs の検討

- ・ 優れた取り組みをしているのは間違いないが、SDGs の目標は 2030 年までである。そろそろアフターSDGs を見据えた取り組みを考えなければならない時期に来ている。先進的な取り組みをしてきた大学だからこそ、これまでのことを振り返りながら、他大学にさきがけたプロジェクトをいち早くスタートさせることを期待したい。

(4) ダイバーシティ

①長所・特色とされた事項

○高い国際性

- ・ 文科省「スーパーグローバル大学創成支援」の評価において 2 回連続の S 評価を獲得したことは、これまでの国際交流や国際貢献の内容が高く評価されたこととして捉えられる。コロナ禍の副産物として DX が進む中で、さらに世界が近くなっていることから多くの学生が国際化の取り組みに触れる仕組みを構築いただきたい。D&I に関しても、女性教職員比率を上げる努力がなされている。

- ・ グローバルに関する取り組みは 10 年間の SGU において S 評価を取り続けている実績もあり評価できる。加えて、上記 3 と重複するが、ダイバーシティをしっかりと評価項目に掲げられていることも素晴らしい。今後、ダイバーシティ&インクルージョンの取組がより広がりを見せることを期待したい。
- ・ 開始当初から SGU 大学としてグローバル化を推進、牽引し、「S」評価獲得と日本を代表するスーパーグローバル大学となる。キャンパス内も多種多様な人種・国々の学生が多く、グローバルキャンパスであることが実感出来る。女性比率の向上と共に、SGU 終了後も重点課題として推進・改善してもらいたい。
- ・ 海外諸大学からの留学生の受け入れや交流を促進され、SGU の中間評価で「S」を取得されたことは大きな成果として評価できると思います。23 年度は、コロナ禍で減少した外国人学生の受け入れや日本人学生の派遣再開など量的拡大に取り組まれた一方で、今後は質的な成果が重要になると思います。その上で、交流校との教員・研究者に関するクロスアポイントメント契約や前述の重点研究での連携強化は、交流を根のあるものにしていくためにも非常に意味のある取組みだと思います。

いうまでもなく急速な少子高齢化の中で、グローバルリーダーとなりうる人材の育成が企業や社会においても喫緊の課題となっております。フラット化と分断化が同時に進む世界の中で、リープフロッグ現象が起こっているグローバルサウスの存在感が益々大きくなることを考えると、早くからアフリカ諸大学との交流を開いてきた創価大学として、今後それらをどのように発展的なものとしていくかが SGU としても重要なポイントになるのではないかと思います。

熱帯性マラリア地域での日本人学生の派遣が難しい状況にあると思いますが、企業のアフリカ市場参入も加速化しており他大学も交流に乗り出している現状等を踏まえ、今後の方針や対策の見直しをお願いできればと存じます。

②課題とされた事項

○教職員における女性比率の向上

- ・ 教職員の DEI (Diversity, Equity & Inclusion) の推進の中の女性比率に関しては、あくまで公平性等の観点からの最低限クリアすべき課題ととらえています。女子短期大学の新入生募集停止を控え、4 年制への女性応募者数が増える可能性もあり、大学教職員側の統合も図られるものと推察しますが、働き方の柔軟性やサポート体制を含め KPI 達成に向けての仕組み構築をお願いできればと思います。

また、国際性を特色としている創価大学では、より深層的な観点から国際競争力を高めるための DEI のあり方を検討されても良い時期ではないかと思います。

- ・ 創価大学の学生の中には、在学中にリーダーとして活躍してきた女性がたくさんいる。彼女たちが社会で活躍していることを踏まえれば、そうした卒業生を外部応援団のような形で招き入れ、経営ボードにしっかり提言してもらうような組織作りも手始めとして必要ではないか。

ダイバーシティは女性だけの比率アップだけが問題ではないが、野心的な数値目標を定めて実施するクォータ制の導入などについて、早急に取り組むべきだと考える。女性の大胆な登用と組織風土の改革が求められる。

- ・ 女性職員比率の向上は一朝一夕にはならないものですが、目標達成に向けてご尽力ください。

(5) 経営基盤の構築

①長所・特色とされた事項

○学部・学科を含めた組織再編

- ・ 収支決算が良好に推移したこと、限られたリソースを有効化するために学部学科の再編に着手していることは注目に値する。
- ・ 入学者数が減少傾向の中で、為替の円安要因が大きかったとは言え財政基盤の健全性を維持できていること、また 2050 年の再エネ 100%に向けたロードマップを作成されたうえでキャンパス整備を進めておられる点は高く評価できると思います。

新入生定員割れの状況下で進めておられる改組や学部併合に関しては、グリーンテクノロジーでの文理融合、経済学部と経営学部の融合など、賛否はあるかもしれませんが時代の要請に応じた取組みではないかと感じます。様々な分野で専門性が深まる一方で、新しい価値の創造はそれらを統合させるところから生まれると考えます。

不連続で急速な変化の時代においては、既存の概念や価値観における二項対立を乗り越えていく必要があります。そのような新たな価値を創造できる人材の育成が社会の要請でもあると思います。学生数減少に伴う学部併合というネガティブな改組ではなく、これを機に、創価教育の人間主義に基づく特色や強みをいかに発揮していけるかという今後に期待しております。

②課題とされた事項

○多様な入学者確保に向けた取り組み

- ・ 18 歳人口の大幅な減は、どの大学にとっても大きな課題となっている。その中で、より創価大学の資源を活かした高大接続事業の充実が望まれる。その際、高校教育の現状をしっかりと把握することが必要であり、高校で必修化された総合的な探究の時間を受講してきている高校生にどのような教育を行っていくのかについて抜本的に考えていく必要がある。また 18 歳人口に加えて社会人に対するリカレント教育への取り組みにも注目している。

- ・ 志願者の減少に歯止めをかけたことは、大学全体がブランド力向上を含めて募集活動に取り組んだ成果が出たものと推察される。それでもなお、入学定員が満たされない状況にあることを鑑みて厳しめの評価とした。今後、ますます 18 歳人口の減少が進む中で、入学者のダイバーシティをどのように広げていくかについて検討されることを期待する。
- ・ 寄付金や為替相場等はその時々によって変動するため、経営基盤の安定化＝志願者数・入学者数の安定的な確保が必須。ここが、現在の最大課題とも言えるのではないかと思う。
- ・ 入学定員が満たされていない等の課題は、後々になってボディブローのように効いてくる問題である。創価大学は充実した教育が行われているにも関わらず、定員割れを起こす学部があるのはなぜなのか。立地の悪さや大学の魅力が外部にうまく発信できていないなどの複合的な要素が考えられる。
立地に関しては、都心部でのサテライトキャンパス設置など、リカレント教育の実施も視野に入れた施策を早急に検討する必要があるだろう。また、幅広い人材を集めるための戦略として付属や系列校以外への情報発信や高大連携などをもっと積極的に行い、「創価」の理念や価値は堅持しつつ、「創価」にはこだわりがない受験生や保護者への魅力発信をどう進めていくかを考えなければならない。また、寄付金に関しては、返礼品などを活用した従来にない戦略を打ち立てるなど新たな発想で取り組んでほしい。
- ・ 寄付金という形の大学支援を多く集めたことは、指示される取組を行っていることの証とも言えると思いますが、やはり入学者による学費収入の確保は大学の持続可能な運営において最も重要な事項です。短期大学が大学組織に昇華されることや学部新設などの改組により、さらに多くの学生が入学を希望する大学となるよう期待しております。

3. 外部評価委員からの講評

- ・ まず大学の理念がビジョン等にもしっかりと反映されているところが評価できる。またその理念が絵に描いた餅にならずに、重点的な研究テーマと、教育のコンテンツにしっかりと反映されている。グローバル化や SDG s などの教育コンテンツにも理念に紐づけられて特徴ある教育を展開されている。また教育の DX 化も進み、個々の学生が自らの学びと成長を見て取れる環境も導入されていることも評価できる。
ただしこれらのコンテンツが有機的に連動し、「最終的に学生の学びにどのように寄与しているのか」、についてはさらに精度を高め、工夫する必要性を感じている。例えば成果の可視化のあり方は個別の授業アンケート中心で適切なのか、また学生がそれらを活用し、さらに自らの学びを促進させるアクションにつなげることはシステム化できているのか、などである。最後に、学生確保の問題は今後さらに厳しくなることがどの大学も予想される中で、これから設置される新学部や新学科は、これまでの常識とは大きくことなる「新しさ」が必要である。ピンチをチャンスに変えるためには、ぜひ新しい発想で探究を行ってきている高校生に響く学びの提供をお願いしたい。

- ・ 全体として取り組みは素晴らしく、課題についても洗い出されているので、内部質保証の観点からもしっかりと機能していることがうかがえる。

これからの学生募集という観点で、創価大学のビジョンと合致しない可能性もあるが、「地域の中における学生の姿」というものがより見えてくることが、地道ではあるが大学としての評価につながっていくと感じている。八王子市との連携や八王子コンソでの活動が豊富にあること踏まえ、グローバルと並行して地域の中で学生を育成していることについてもしっかりとアピールをしていくことが今後の発展につながっていくと思う。

また、改組の一環として「短大の学生募集停止」とあったが、短大の内容をしっかりと4年制大学に組み入れていくとあったので、「学生募集停止」という表現でなく、むしろ発信方法としては短大の在学生在が寂しい思いをしないような表現をするという意味合いでも「4年制大学に発展します」という広報戦略を取っていくことも良いのではないかな。

いずれにしても、高等教育の世界において、創価大学は教育改革の進む大学としての評価が高まっていると感じており、そのことが、地元の高校や地域の人々にも共有されていくことが期待される。

- ・ SDGs やデジタル分野において、日本は後塵を拝しています。平和や人権、気候変動、SDGs といったテーマは、これからの地球や世界では、さらに大事に、深く考えていかねばなりません。

現在、中学でも高校でも社会課題を見つけ、解決する「探求」に時間を割いています。

大学において、何が出来るのか、それに向けて大学全体がどう取り組んでいるのか、社会・地域貢献は出来ているのか。教育内容は非常に大事なファクターとなり、そういった視点で高校生・受験生・保護者・地域社会は見ています。

そこで信頼が得られれば、「選ばれる大学」となり、志願者・入学者も回復すると思います。学生×教員×職員が、諸々の垣根を取り払い、一丸となって同じ絵を描けるか。期待しています。

- ・ 多くの重要な課題を抱えつつも建学の精神と教育理念に基づき、毎年着実に改善と改革を進めておられることに敬意を表したいと思います。コロナ禍を経てハイフレックス授業を導入され、学びと学生生活両面からの支援も拡充されており、教職員と学生がここまで一体的な取り組みを進められているのは素晴らしい伝統だと思います。何よりも、学生自身が自己の成長を実感でき、同時に学生生活の充実度の向上が大学のブランド力向上への原動力ではないかと思っています。

一方で、創価大学学部、通教ともに収容定員充足率が過去5年間で低下しており、急速な少子高齢化も背景にはあるものの、大学院の定員充足率も6割強でほぼ横ばいのため、研究分野での競争力や社会への発信力強化もブランディングには重要な要素だと思います。

創立者が逝去された今、在学生だけでなく卒業生がいかに社会に貢献していけるかが益々問われる時代になったと思います。卒業生も一体となって、創立者が切り開いてくださった道をさらに盤石で発展的なものにしていけるよう、共に新しい大学建設と人材の育成に寄与していきたいと思っています。

- ・ 創価大学の教育には定評があり、そのことを前提に辛口の総評をさせていただく。
人生100年時代と言われる中で、生涯にわたり学び続けることの必要性、リカレント教育の重要性が議論されている。これは、新たな時代の教育を考える上では避けて通れないことであり、早急に対応策を講じなければならない。その際に考慮すべきはキャンパスの立地であろう。また、通信教育をどうするかという議論も必要になってこよう。18歳人口が急激に減少し、今後20年弱の間に約3割減少することを考えれば、もはや先送りはできない問題である。
現在のキャンパスの立地をどう考えるのか。大学の統廃合が叫ばれる中で、財務基盤が安定している創価大学が主導した形での都市部の大学との統合等、大胆な施策も検討に値しよう。また、入学者が減少傾向にある通信教育課程をどうするのか。こちらでも早急に方針を定め、リカレント教育という文脈の中での新たな取り組みが考えられないだろうか。通信教育のグローバル化という視点で考えてみると、その可能性は大きく広がってくる。いずれにせよ、国の政策の方向性をしっかり見据えながら、早めに手立てを打っておく必要がある。
- ・ 日頃から地域課題の解決に大きなご尽力をいただいております、感謝申し上げます。日々接する貴学の学生たちは学ぶことに大変熱心であり、彼らをご指導される先生方の熱意には圧倒されるものがあります。引き続き、優れた人材を輩出する地域の中核であり続けますことを期待しております。